

第1部 過去から現在へ

「滋賀の男女共同参画～これまでの10年と新たな課題～」 滋賀県知事 嘉田由紀子

- ・ 条例が制定されてから10年を経て、社会はどのように変化してきたのか。「数字でみる 滋賀の男女共同参画」と題して、「男性は仕事をし、女性は家庭を守るべき」という考え方や女性の働き方に関する考え方など意識についての調査結果をはじめ、家庭、職場、地域社会、政策・方針決定における滋賀の現状を紹介。



- ・ 社会や経済を取り巻く情勢の変化と男女共同参画の「これからの課題」としては、根強く残る固定的な役割分担意識からの脱却、仕事と生活の両立の難しさ、単身世帯の増加など家族形態の多様化、超高齢社会における生活・介護の課題（男性介護者の増加）、男女間の暴力行為など人権侵害（DV、セクハラ、ストーカー等）、一人ひとりが輝き、社会の活力を維持するために、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の実現や地域課題解決や地域コミュニティの再生、セーフティネットづくりに人と人がつながって、多様な人が関わることを重要であることを提示。
- ・ 男女共同参画の実現、女性の活躍の広がりについては、様々な場面でまだまだ課題が多いが、そんな中、滋賀県内でも、地域課題解決のために起業したり、農業分野や女性の少ない分野へ進出したり、チャレンジする女性が増加。そうしたチャレンジのいくつかを写真で紹介。

※資料等詳細は、インターネット知事室の「知事講演」に掲載

第2部 現在から未来へ

1. 分科会報告

（分科会① 今井さんより）

- ・ カフェの経営にチャレンジされた鳥谷さんには、その行動力、実行力に驚かされた。チャレンジしたいけれど踏み出せないという人が多い中、まず一步を踏み出すことが大切だと感じた。

- そして次は続けること。一生懸命にやりすぎて、自分も、家族など支える周りも疲れてしまい、ぎくしゃくしてしまった時期もあったとのこと。少し手を抜いたり、甘えたりする方が、感謝の気持ちが自然に出るということで、感謝の大切さをお話しされた。



- 企業内で「女性力活性化委員会」を立ち上げられた前田さんは、働きやすい職場づくりに向けた提言などを行うため、職場アンケートなどをもとに社員の悩みなどを把握し、育児・介護に関する制度を改正するという成果を出された。
- アンケート結果から、コミュニケーションや相手の立場に立って考えることの大切さが認識されるとともに、女性社員について、家庭生活重視か管理職をめざすのかという“考え方の二極化”が浮き彫りになったとのこと。継続就労の次にくる課題が、管理職になるかどうかの選択ではないかと思う。
- まずは、“やってみたい”ということ言葉を、言い続けることが大事だということ、そして最終的には、自分の人生は自分で切りひらくということ。そうやってチャレンジする女性が増えていくと思う。お二人の30代の女性たちに教えられた。

(分科会② 津止さんより)

- 男性介護者は100万人を超え、介護者の3人に1人が男性であるという状況。男女がともに力を合わせて介護を担う時代が到来しているが、一方でまだまだ介護は女性がするものという意識があり、実態とのギャップをどう埋めていくかが課題である。
- 育児については社会的な課題と認識されてきており、育児に積極的に取り組む男性を「イクメン」というが、介護に取り組む男性を「ケアメン」と呼ぶことを昨年から提唱している。あまり軽々しい言い方をしてほしくないというご意見もあると思い、慎重に発信してきたが、批判はほとんどなく、好意的に受け止められている。介護する男性をポジティブに発信することで、今まで見ていなかった介護の現状を社会に伝えるきっかけになると思う。
- これからの時代には、介護する男性が、そのことによって生活が成り立たなくなることを回避し、家族の関係が良好な状態で循環することが重要。そのために必要なことは、一つは仕事一筋で生涯を全うするという働き方を、介護することを前提とした（包み込んだ）ライフスタイルに変えること。もう一つは、働いている介護者を支える就労支援型の介護サービスがあること。これらが両輪として実現することで、仕事と介護の調和がとれる状態になると思う。
- これは働きながら介護する男性だけでなく、女性にとっても必要なシステムである。

(分科会③ 広石さんより)

- ・ 女性が理工系で働くことについて、理系で働く3人の女性に集まっていただき、どのようにキャリアを積んでこられたか、どうしたらその道に進みたい人が増えていくかということを話し合った。
- ・ 梅田さんが働く大学の医学部では、女性も増えてきており、女子トイレの数が少なかった時代から考えると、環境は少しずつ改善されてきている。しかし、子ども3人を育てながら医大の教員として働く先輩はいない。後輩は増えてきたので、どうすれば働きやすい職場になるか、話し合いながら働いているとのこと。
- ・ 今村さんのお話では、大学時代にも農学部では女性の教授がいたり、研究職になってからも夫婦で活躍されている研究者がいたりして、こういうふうにしていけばいいんだということがイメージしやすかったとのこと。
- ・ 小島さんは、光回線などを扱う部署に女性が初めて配属されたということで、男性の方が遠慮してしまう傾向があったが、女性の方から積極的に働きかけていくことによって、うまくなじんでいけているとのこと。
- ・ 私自身は理工系分野への進路を考えている中高生と、すでにその道で働いている先輩女性たちとをネット上でつなぐ仕事などを手がけているが、今回の話し合いの中で、子どもたちが進路選択に悩むとき、5年後、10年後のこんなふうになるのかなというイメージが持てるよう、ロールモデルを紹介していくことが大切ではないかという意見も出た。



2. キーワード

(嘉田知事)

- ・ 今井さん、津止さん、広石さんから、それぞれのテーマを実現するために求められるキーワードを3つずつ挙げていただきたい。

(今井さん) 女性が社会参画(チャレンジ)するための3つのキーワード

- ・ 事例発表していただいた方は、非常にがんばっておられる方々だったが、死にものぐるいでがんばるのはマイナス面も出てくる。だから一つは「がんばりすぎない」。
- ・ 目標に向かって進む中で大切なこととしては、「あきらめない」、「夢を捨てない」。
- ・ 4つめになるが「時間の使い方の工夫」も大切だと感じた。

(嘉田知事)

- ・ 仕事と家庭の両立という点では、私も夫と子どもに共同作業者になってもらうよう、徹底的に家事能力を身につけてもらった。男性の家事能力向上もワーク・ライフ・バランスにとって重要である。

(津止さん) 男性介護者の仕事と家庭生活の両立のための3つのキーワード

- ・ 一つは働き方を変えること。これまでのように、男性の働き方をモデルにして、そこに女性を参画させるというやり方ではなく、女性たちがやってきた多様な働き方を主流にし、男性もできるようにして、それでも生きていけるという仕組みづくりが必要。
- ・ 二つめは、家族介護者支援のための就労支援型の介護サービスを提供すること。
- ・ 三つめは、介護している人の事情を把握し、サポートするための介護者支援センターを設置すること。

(嘉田知事)

- ・ 滋賀県では、年老いても住み慣れた地域で安心した生活ができるよう、医療と福祉が一体的に生活を支える医療福祉を推進している。そこで一番大事なのは、仕事(社会参画)と介護が両立できること。その仕組みづくりとして、介護者支援センターの存在は重要であると思う。男性ができるということは、他の方がやりやすくなるということにつながる。



(広石さん) 女性が理工系で働くための3つのキーワード

- ・ 一つめは、自分のテーマを持つということ。理系の場合、大学の中で研究専攻を決めて社会の中でずっとそのテーマを追いかけていくが、その先に、工夫をしながら多様な働き方を見つけ出していけるのではないかと思う。
- ・ 二つめは、ロールモデルの存在。男性の育児休業にしても、介護にしても、具体的で身近な事例を見せていく、伝えていくことが重要で、理系女子についても同様。
- ・ 三つめは、ロールモデルに出会う場。魅力的な働き方をしている人たちに、個人が積極的に出会いに行くだけでなく、中学・高校・大学時代に出会える機会をつくるという取組も必要ではないかと思う。

(嘉田知事)

- ・ 3つのテーマについて、当事者の発表から課題などを見てきたが、これらは社会の要

請でもある。コストを抑えながら満足度を高めるという社会づくりのために、男性も女性も、仕事もしながら育児も介護もできる、そういう役割を果たしていくことが求められている。

- ・ 今日のお話では、それぞれの視点から取り組むポイントを発見できる機会になったのではないかと思う。

3. 会場からのご意見

- ・ 経営者としてみたとき、人材育成・登用と業績と両方を見ないといけない。管理職には男性からしか登用しないという決まりはなく、能力のある人を登用するという事。そのためには、管理職とは何なのかということを知覚する必要があるが、良くないのは、自分が今やっている仕事をそのまま持ち上げようとする場合。管理職など上の役職に行くほど、仕事の量は減り、判断や責任を取るという内容に変わっていく。だから時間はかからなくなるはず。女性も早く管理職になってもらって、言いたいことをもっとと言える場所に立っていただきたい。そのために最大限応援していきたいと思っている。

4. おわりに

(嘉田知事)

- ・ 今まさに、日本では女性が求められている。商品やサービスなどの消費動向を左右するのは女性であり、企業において意思形成に女性が入っているところは結果を出している。また、行政においても、男女ともに生活者が内部にいないと、今の時代に求められる政策をつくれないう状況である。
- ・ 男女ともにワーク・ライフ・バランスがとれている、つまり生活者であるということ根っこに持ってこそ、企業活動も地域づくりも、そのクオリティを上げていけるといえる。
- ・ 私は、滋賀を“住み心地日本一”にしたいと思っているが、そのための大変重要な条件が、男女ともに参画する社会であるということ。その具体的な取組として、10月19日に男女共同参画センター内に、女性の就労支援をワンストップで対応する窓口として「滋賀マザーズジョブステーション」を開設した。
- ・ 男女ともに参画する社会づくりに向けて、本日の3つのテーマでの議論は、県の行政としても得るところが多かった。3人のコーディネーター・講師の方々にお礼を申し上げ、まとめとしたい。